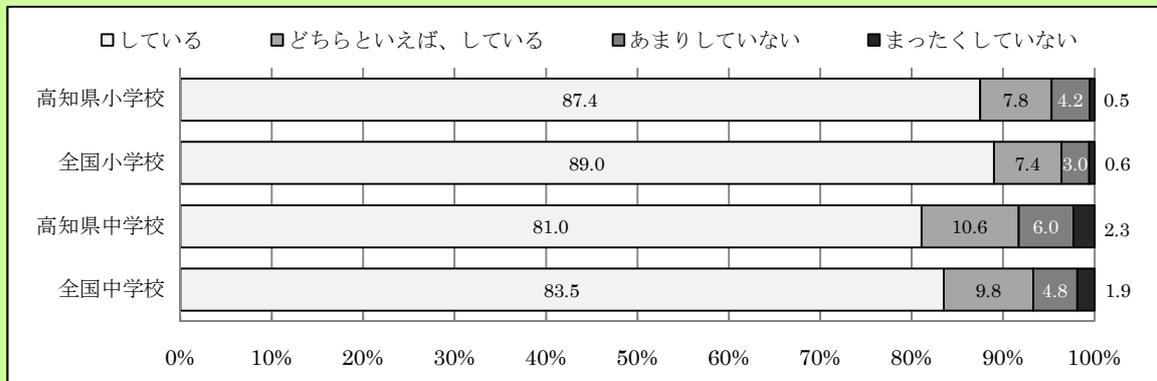


## IV 質問紙調査の状況

- ・「肯定群」は、選択肢の「している・どちらかといえば、している」や「当てはまる・どちらかといえば、当てはまる」など、肯定的な選択肢を選択している場合を表す。
- ・「否定群」は、選択肢の「あまりしていない・全くしていない」や「どちらかといえば、当てはまらない・当てはまらない」など否定的な選択肢を選択している場合を表す。

規則正しい生活をする子どもの方が正答率が高い傾向にあります。

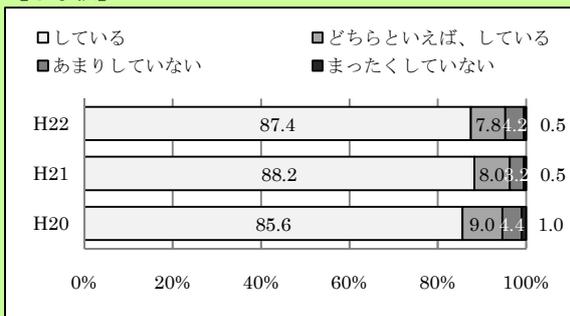
### 毎日朝食を食べている



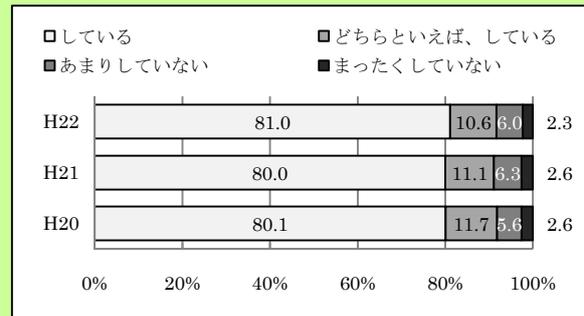
【児生小1、中1】

### 《平成20年度～平成22年度の経年比較》

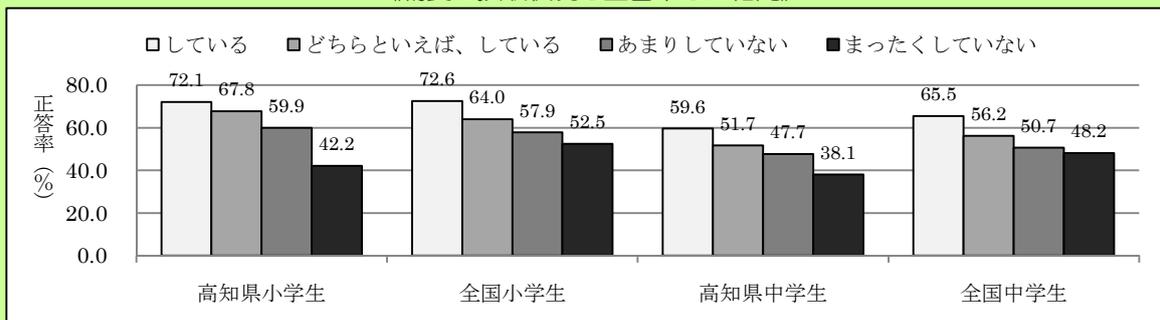
#### 【小学校】



#### 【中学校】



### 《朝食の摂取状況と正答率との相関》

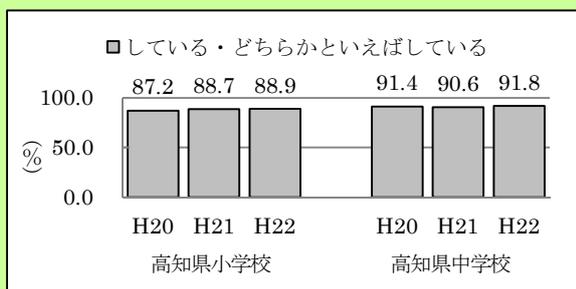


朝食を毎日食べている子どもは、小学生は、87.4%、中学生は81.0%で、それぞれ全国より小学生は1.6ポイント、中学生は2.5ポイント低くなっている。

平成21年度と比較すると、「している」「どちらかといえば、している」と答えた子どもは、小学生で1.0ポイント低くなっている。中学生では、0.5ポイント高くなっており、改善の兆しが見られる。また、小・中学生ともに朝食を食べる子どもの方が、正答率は高い傾向にある。

### 毎日、同じくらいの時刻に起きる

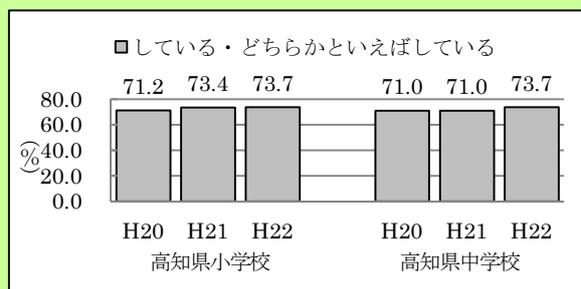
《平成20年度～平成22年度の経年比較》



【児生小4、中4】

### 毎日、同じくらいの時刻に寝る

《平成20年度～平成22年度の経年比較》



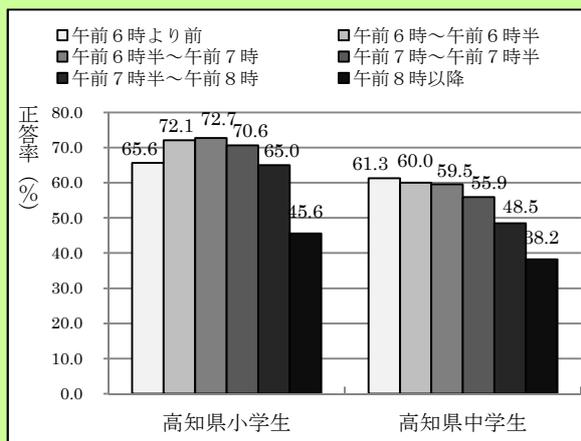
【児生小3、中3】

毎日同じ時刻に起きる子どもは、平成21年度と比較すると、小学生ではほぼ同じであるが、中学生では1.2ポイント増えている。

同様に、毎日同じ時刻に寝る子どもは、小学生ではほぼ同じであるが、中学生では、2.7ポイント増えている。

### ふだん、何時ごろ起きますか

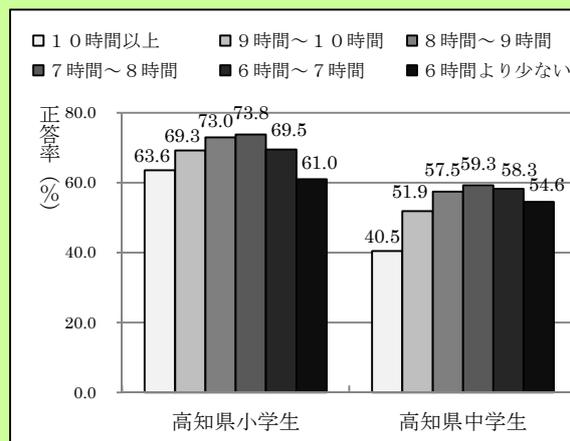
《起床時刻と正答率との相関》



【児生小9、中9】

### ふだん、1日にどれくらいの時間睡眠をとりますか

《睡眠時間と正答率との相関》



【児生小11、中11】

起床時刻と正答率の関係から、小学生では、午前6時～午前7時半に起床する子どもに正答率が高い傾向が見られ、中学生では、午前7時までに起床する子どもに正答率が高い傾向が見られる。午前8時以降に起床する小・中学生の正答率は、極端に低くなる傾向がある。

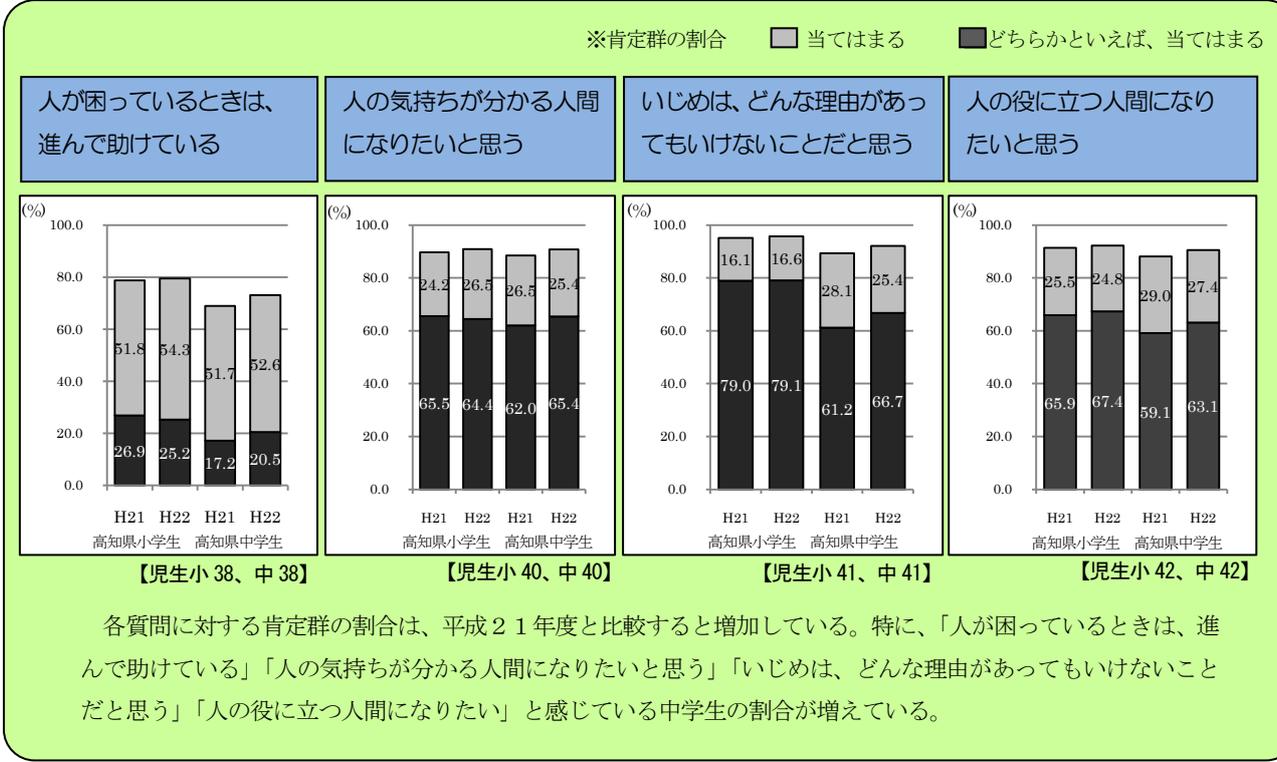
睡眠時間と正答率の関係からは、小・中学生とも睡眠時間が7～8時間の子どもに正答率が高い傾向が見られる。

規則正しい生活をしている子どもが、少しずつ増加傾向にあり、特に中学生に改善傾向が見られます。

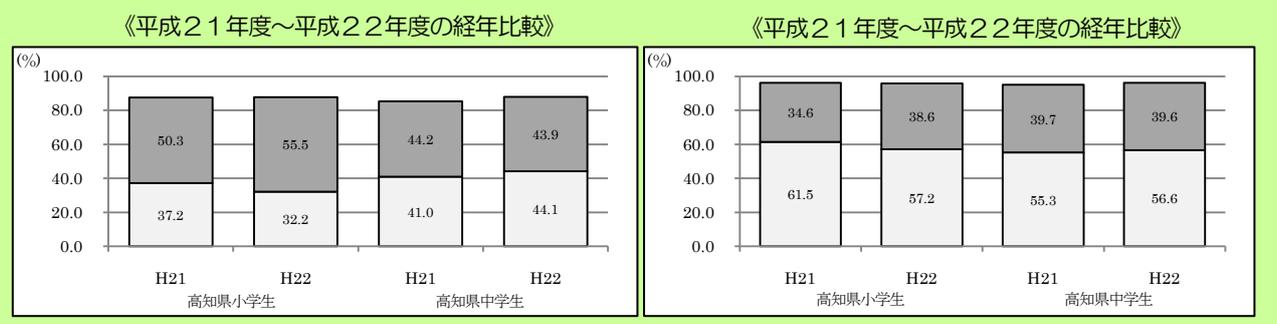
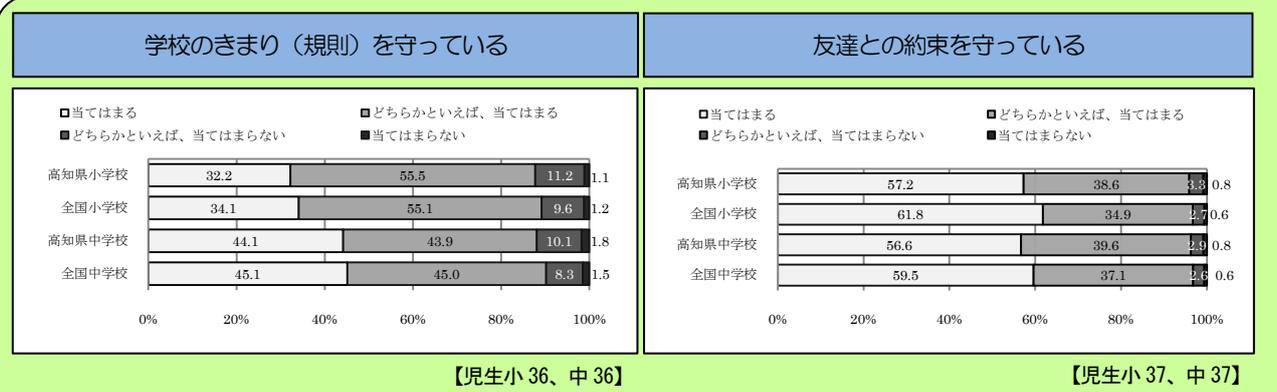
十分な睡眠時間が必要ですが、睡眠時間は長すぎても、短すぎても正答率が低い傾向が見られます。起床時刻と睡眠時間の関係からみると、小学6年生は、午後10時頃までに、中学3年生は、午後11時頃までに寝るとよいでしょう。

自尊感情に関する質問より

他者の心情を理解するとともに、思いやりの心をもった児童生徒が増加しています。



規則や約束を守ることができる、規範意識を育む取組が必要とされています。

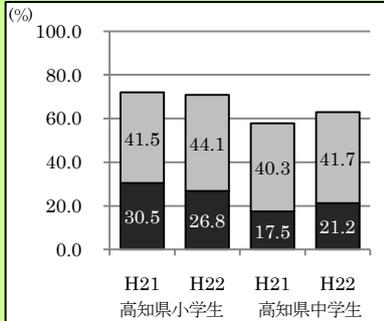


「学校のきまり（規則）を守っている」よりも「友達との約束を守っている」において、「当てはまる」の回答の割合が全国との開きが大きい。平成21年度と比較すると、「当てはまる」と回答した割合は、小学生では減少傾向にあるが、中学生では増加している。

自分のよさを理解し、夢や目標をもつことができる児童生徒を育てることが大切です。

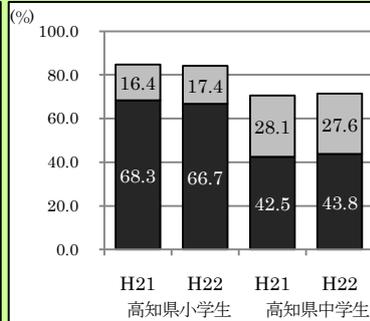
※肯定群の割合 □ 当てはまる 行っている ■ どちらかといえば、当てはまる どちらかといえば、行っている

自分には、よいところがあると思う



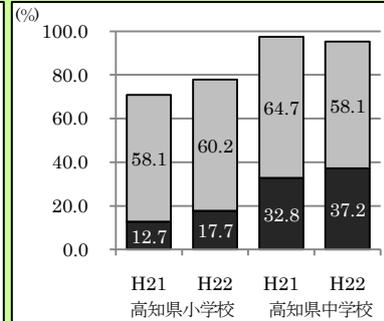
【児生小7、中7】

将来の夢や目標を持っている



【児生小8、中8】

児童生徒に将来就きたい仕事や夢について考えさせる指導をしている

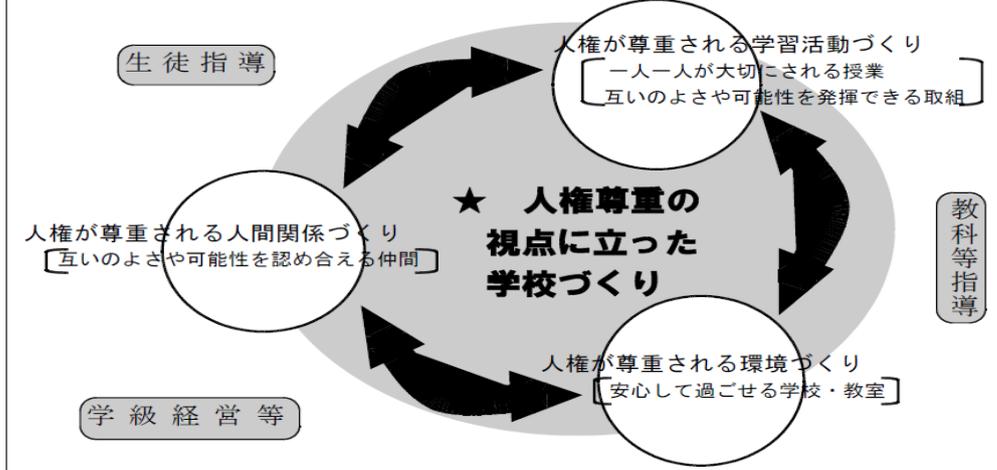


【学小29、中29】

平成21年度と比較すると、「自分には、よいところがあると思う」「将来の夢や目標を持っている」の質問に対する肯定群の割合は中学生では増加しているが、小学生は減少傾向にある。「児童に将来就きたい仕事や夢について考えさせる指導をしている」の質問に対する小学校の肯定群の割合は増加しているが、学校の取組の成果が、小学生の回答の中にまだ現れていないので、今後さらに指導方法を工夫する必要がある。

【人権教育の指導方法等の在り方について第三次とりまとめ～指導等の在り方編～】

【参考】人権尊重の視点に立った学校づくり

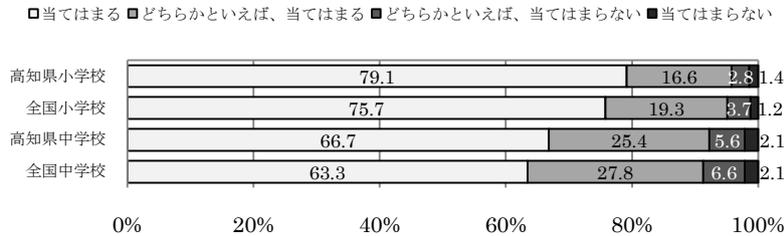


第三次とりまとめでは、「自分の大切さとともに他の人の大切さを認めること」が、理解するに止まることなく態度や行動にまで現れるようにすることや、児童生徒の人権感覚を育てていくためには、『学習活動づくり』や『人間関係づくり』と『環境づくり』とが一体となった学校全体としての取組が必要であることが示されています。

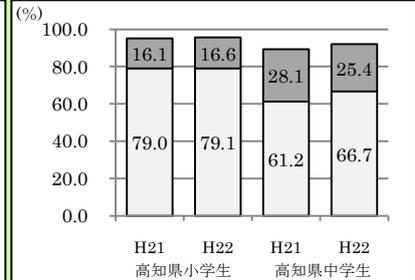
児童生徒と同じ目線に立ち、意見をしっかりと受け止めて聴く、明るく丁寧な言葉で声かけを行うことや、日頃から人権学習に親しむ機会を提供していくような学級経営をはじめ、学校生活全体の中で自らの大切さや他の人の大切さが認められていることを、児童生徒自身が実感できるような状況・場の雰囲気づくりを生み出すことが重要です。「確かな学力」を育むためには、学校全体として「一人ひとりを大切に、個に応じた学習指導に人権の視点を意識して取組む」ことを共通理解し、学ぶことの楽しさが感じられるようにするとともに、自他を尊重できる人間関係を育み、学習意欲の向上につなげることが求められています。

人権が尊重される環境の中で、児童生徒の人権感覚や人権意識を育むとともに、実際の生活や人間関係の中に生かせるような実践が必要とされています。

いじめは、どんな理由があってもいけないことだと思う。



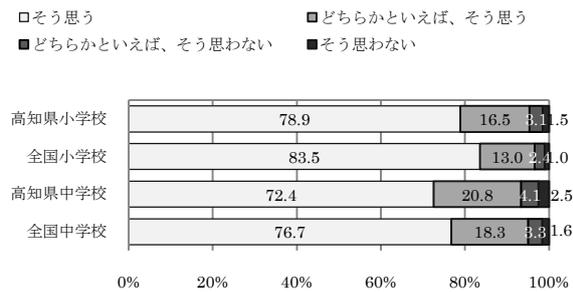
《平成21年度～平成22年度経年比較》



【児生小41、中41】

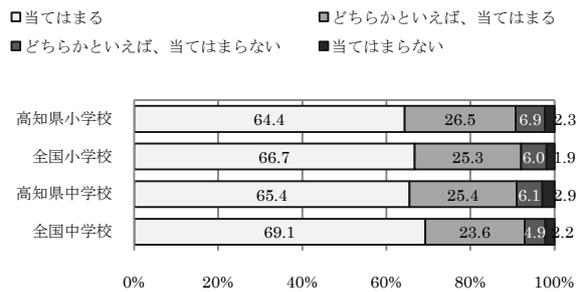
「当てはまる」と回答した小・中学生の割合は全国と比較すると上回り、中学生では「当てはまる」と回答した生徒が平成21年度と比較すると増加している。「当てはまる」と回答した小・中学生の割合は全国と比較すると多いが、小学校と比較すると中学校では「当てはまる」と回答した割合が低くなっている。

友達に会うのは楽しい



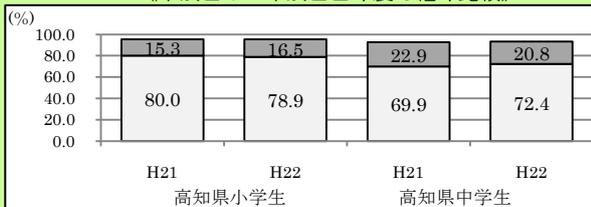
【児生小31、中31】

人の気持ちが分かる人間になりたいと思う

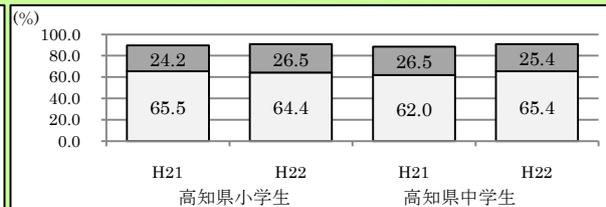


【児生小40、中40】

《平成21～平成22年度の経年比較》



《平成21～平成22年度の経年比較》



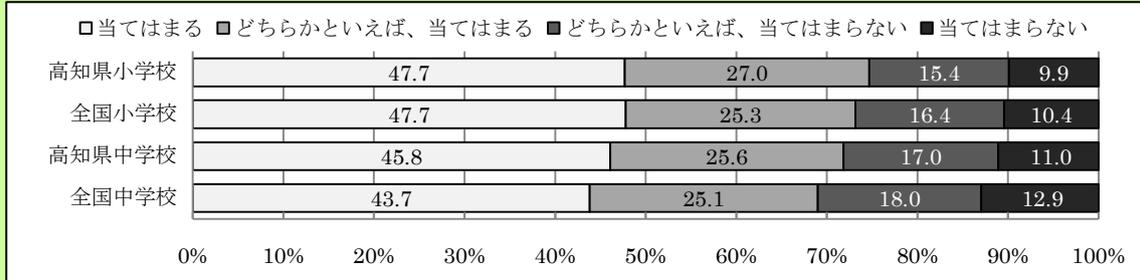
「友達に会うのは楽しい」の質問で、「そう思う」と回答した小・中学生の割合は、全国と比較すると下回っている。平成21年度と比較すると、「そう思う」と回答した小学生の割合は減少傾向にあり、中学生は増加している。

「人の気持ちが分かる人間になりたいと思う」の質問で、「当てはまる」と回答した小・中学生の割合は、全国と比較すると下回っている。平成21年度と比較すると、「当てはまる」と回答した小学生の割合は減少傾向にあるが、中学生は増加している。

質問に対する肯定群の児童生徒の割合は、平成21年度より微増しており、よりよい人間関係を築こうとしていることが感じられます。しかし、「いじめは、どんな理由があってもいけないことだと思う」の質問に「当てはまる」と回答した児童生徒の割合は全国と比較すると高い傾向にあるものの、中学校では小学校と比較すると「当てはまる」と回答している割合が低くなっています。実際の生活や人間関係に関わるような「友達に会うのは楽しい」「人の気持ちが分かる人間になりたいと思う」の質問で、「そう思う」、「当てはまる」と回答した児童生徒の割合は、全国の割合を下回り、特に小学生においては減少傾向にあります。人権感覚を育むとともに、人権意識を高め、日常生活の中に生かしていくことができるよう、自他を尊重できる人間関係づくりを今後も進めていくことが不可欠です。また、互いのよさや違いを認め合えるような仲間づくりを進めるとともに、友達との関わりが楽しいと思えるような活動を計画的に行うことが必要です。

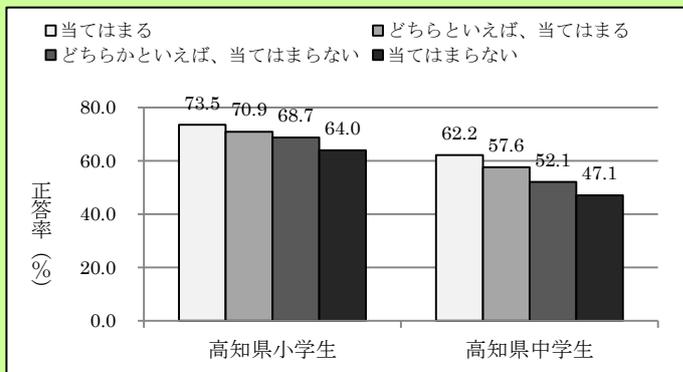
高知県の子どもは全国より読書が好き！～読書好きの子どもは、正答率も高い～

### 読書が好き



【児生小55、中55】

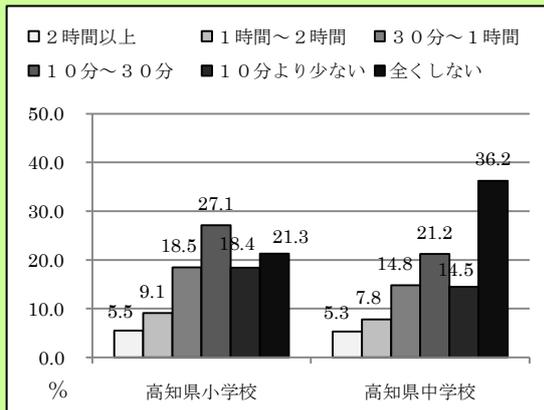
### 《「読書が好き」と正答率との相関》



「読書が好き」という質問に対して「当てはまる」「どちらかといえば、当てはまる」と答えた割合は、全国と比較すると、小学生で1.7ポイント、中学生で2.6ポイント高くなっている。

また、読書が好きなお子もほど、正答率が高い傾向が見られる。

### 家や図書館での1日あたりの読書時間

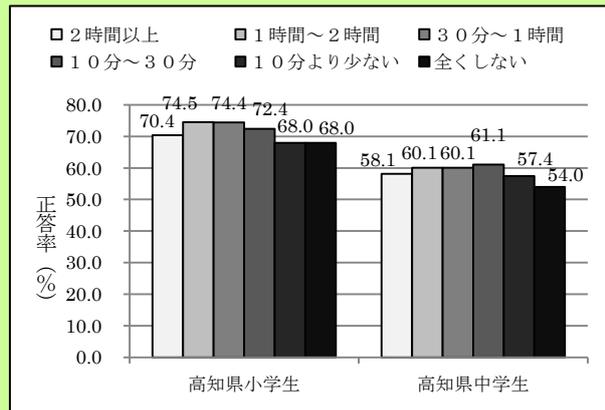


【児生小19、中19】

家や図書館での読書時間は、小・中学生とも10分～30分の子どもが最も多い。また、全く読書をしない子どもは、小学生で21.3%、中学生で36.2%いる。

読書時間と正答率の関係から、小学生では30分～2時間読書する児童の正答率、中学生においても10分以上読書する生徒の正答率が高い傾向にある。

### 《読書時間と正答率との相関》

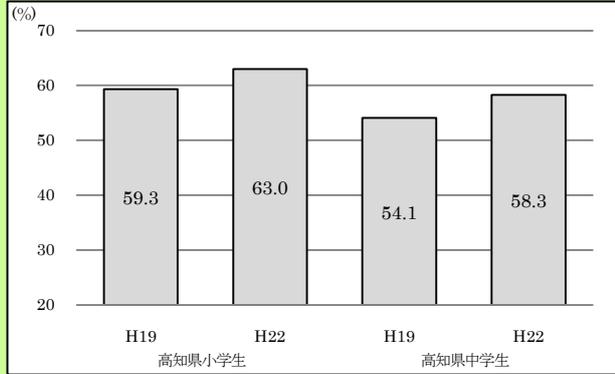


高知県では、ほとんどの小・中学校で「朝の読書」などの一斉読書を行っています。しかし、学校以外の読書時間の少なさについて課題が見られるので、保護者と協力し、家庭の中で子どもたちの自発的な読書、読書時間の増加に向けた取組が必要です。

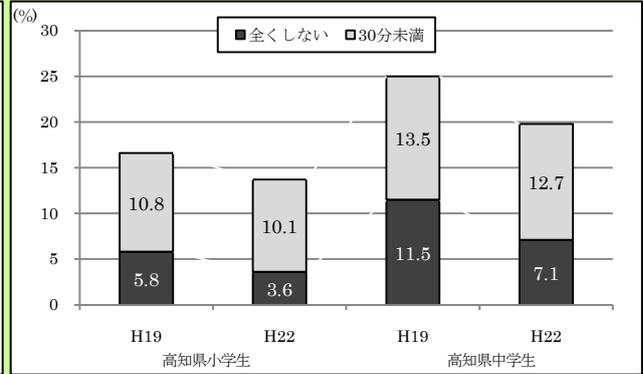
## 家庭での学習時間や学習内容に関する質問より

～家庭で学習する時間は確実に増加してきています～  
 今後は、その内容をしっかり考えていきましょう。

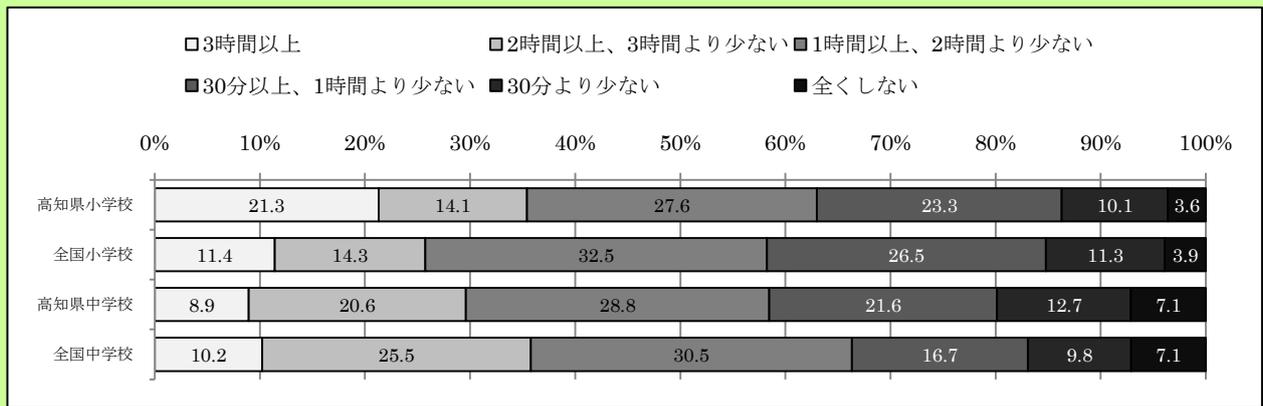
平日に学校の授業時間以外に1時間以上勉強する割合の経年比較



平日に学校の授業時間以外に学習時間が30分未満の割合の経年比較

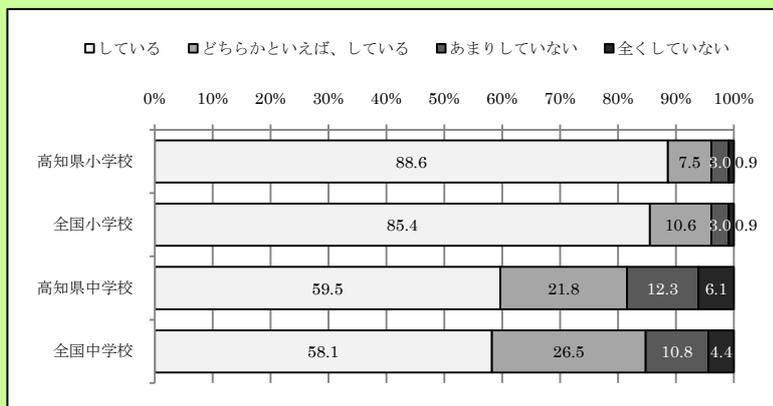


平日1日あたり、学校の授業時間以外にどのくらいの時間勉強しますか



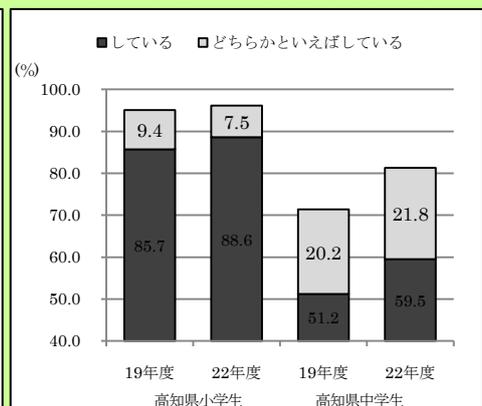
【児生小16、中16】

学校の宿題をしている



【児生小26、中26】

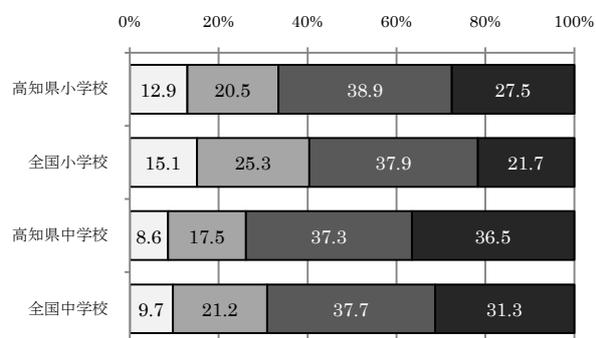
《平成19年度と平成22年度の比較》



家庭で学習する時間は、調査開始以降、増えてきており、学校の宿題をしている割合も増えている。  
 しかし、学習時間が30分未満の割合も小学生で13.7%、中学生で19.8%ある。

### 家で授業の予習をしている

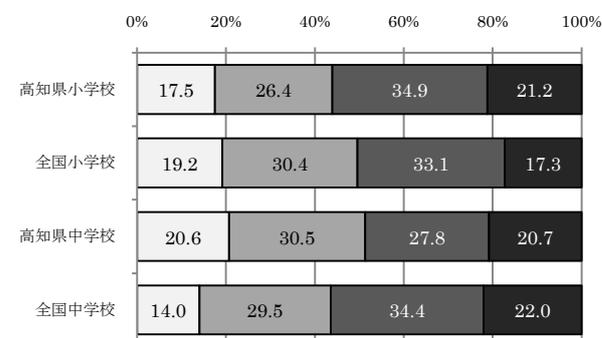
□している □どちらかといえば、している ■あまりしていない ■全くしていない



【児生小 27、中 27】

### 家で授業の復習をしている

□している □どちらかといえば、している ■あまりしていない ■全くしていない

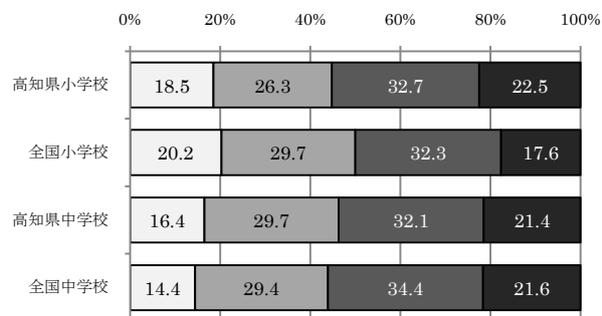


【児生小 28、中 28】

家で授業の予習や復習をする小・中学生の割合は、中学生の復習をする生徒の割合を除き、全国に比べて低くなっている。

### 苦手な教科の勉強をしている

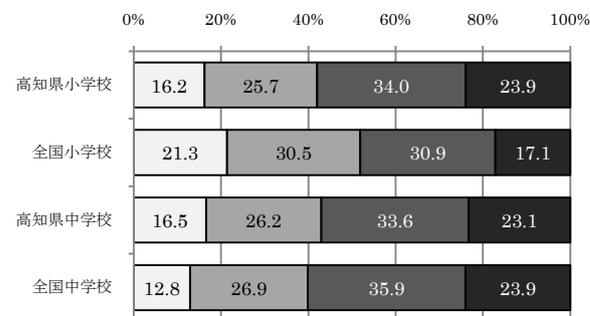
□している □どちらかといえば、している ■あまりしていない ■全くしていない



【児生小 29、中 29】

### テストで間違えた箇所を後で勉強している

□している □どちらかといえば、している ■あまりしていない ■全くしていない



【児生小 30、中 30】

苦手な教科を勉強したり、テストで間違えた箇所を後で勉強したりしている小・中学生の割合は、宿題や授業の予習、復習をしている小・中学生の割合に比べて低い。

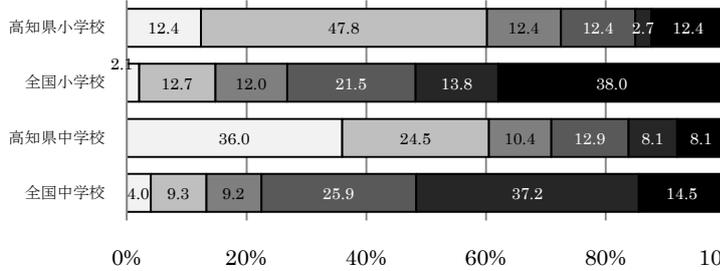
学習は、授業中だけで完結するものではありません。自宅に帰り復習することで、学習内容が確実に定着します。また、予習をすることで、意欲的に授業に臨むことができます。家庭で学習を習慣化できる取組を進め、予習→授業→復習の学習のサイクルを確立しましょう。

苦手な教科を勉強することや、テストの間違った箇所を学習するなどの学習についても小・中学生が取り組めるようにしていくことも必要です。

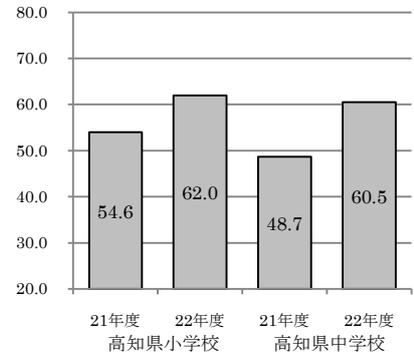
補充的な学習のサポート体制は、充実しています。

### 放課後を利用した補充的な学習サポートを実施している

- 週に4回以上行った □ 週に2～3回行った □ 週に1回行った  
 ■ 月に数回程度行った ■ 年に数回程度行った ■ 行っていない



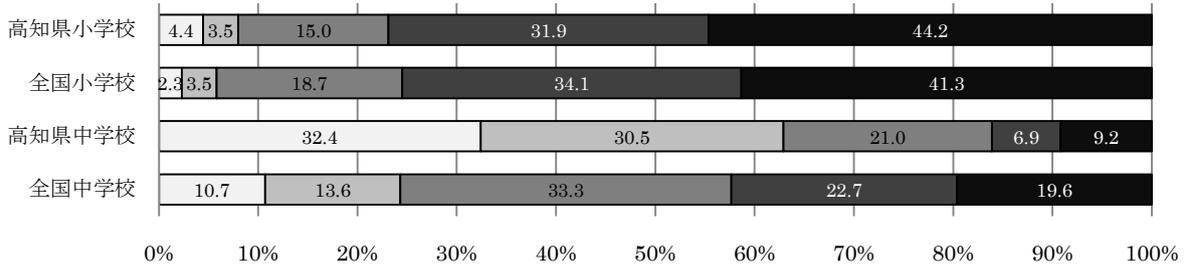
### 放課後に週2日以上実施する割合の経年比較



【学校小24、中24】

### 長期休業中を利用した補充的な学習サポートを実施している

- 延べ13日以上 □ 延べ9日から12日 □ 延べ5日から8日 ■ 1日から延べ4日 ■ 行っていない

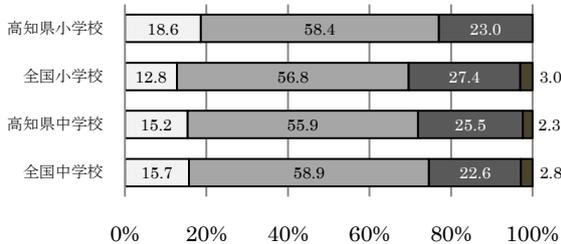


【学校小26、中26】

### 授業における補充的な学習の指導を行った

#### 国語の授業

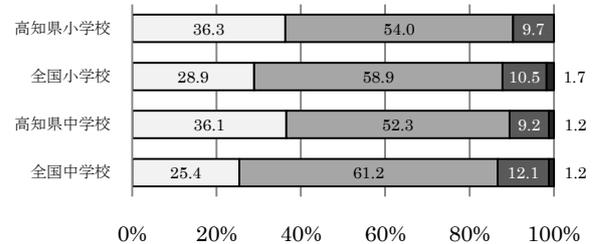
- よく行った □ どちらかといえば、行った  
 ■ あまり行っていない ■ 全く行っていない



【学校小56、中56】

#### 算数・数学の授業

- よく行った □ どちらかといえば、行った  
 ■ あまり行っていない ■ 全く行っていない



【学校小62、中62】

放課後や長期休業中の補充的な学習サポート体制は充実しており、全国と比べ圧倒的に実施の割合が高い。  
 また、国語や算数・数学の授業の中でも補充的な指導をしている割合も高い。

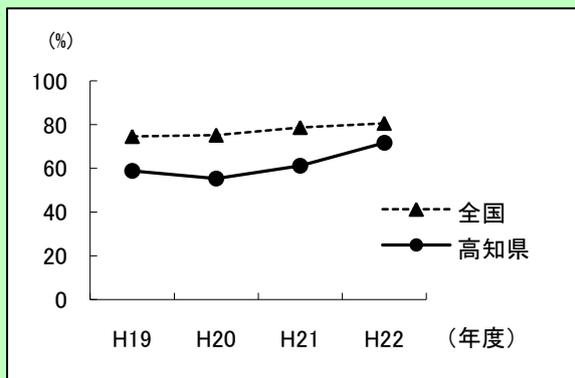
学習サポートの質を高めるために、いつ、どこで、誰が、誰に、どのような内容を指導するかを明確にし、計画的な指導をしていく必要があります。

通常の学級に発達障害等により学習上や生活上で困難を抱えている児童生徒がいます。

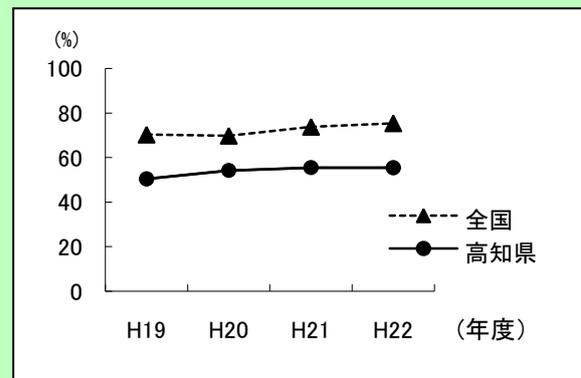
通常学級児童・生徒のうち発達障害等の困難児童・生徒の数【学小16、中16】より

公立小中学校の通常学級において発達障害で学習上や生活上で困難を抱えている児童生徒の在籍している学校の状況の経年比較

小学校



中学校



- 小学校において 71.7% (全国 80.6%) で全国比-8.9 ポイント
- 中学校において 55.4% (全国 75.4%) で全国比-20.0 ポイント

本県の公立小中学校の通常学級において、発達障害により学習上や生活上で困難を抱えている児童生徒の在籍する学校の割合は全国に比べて少なく、特に中学校は全国と比較し、20.0 ポイント少なくなっている。

#### 【考察】

- ・小学校と中学校の連携が十分ではないことから、中学校において、発達障害により学習上や生活上で困難を抱えている児童生徒の実態把握が十分ではないと考えられます。

#### 【対応】

発達障害により学習上や生活上で困難を抱えている児童生徒の理解の推進について、下記のような取組が考えられます。

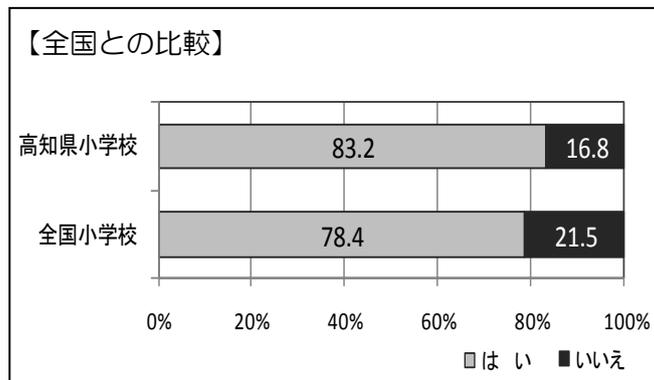
- ・発達障害等の特性の理解について中学校区単位での保幼小中合同研修の推進
- ・個別の指導計画や個別の教育支援計画の作成と活用
- ・各学校に配置されている特別支援教育学校コーディネーターの連携

幼児期の教育は、子どもの健やかな成長のために適当な環境を与えて、その心身の発達を助長することを目的として、幼児期の特性を踏まえ環境を通して行うものです。幼児期にふさわしい保育・教育を通して、人格形成の基礎となる豊かな心情、物事に自らかかわろうとする意欲や健全な生活を営むために必要な態度などが培われ、小学校教育及びその後の教育の基礎となります。

幼児期の教育の成果が小学校の生活や学びにつながり、生活への適応の課題対応も含め円滑な接続を図っていくことが求められています。

新

保育所（保育園）や幼稚園との連携を行っているか。



【学小 66】

本県では、保育所・幼稚園と小学校の連携の実施率が 83.2%であり、全国 78.4%と比べて 4.8 ポイント高いことがわかる。

全国との比較では、保育所・幼稚園と小学校の連携は行われているものの、2割弱の小学校では連携が行われていない実態があります。

今回の改訂された幼稚園教育要領や保育所保育指針、また、小学校学習指導要領において、保・幼・小連携の必要性が新たに加えられました。今後、保・幼・小連携を深めていくためには、単に交流活動や連絡会をもつだけでなく、保育所・幼稚園・小学校がそれぞれの発達の段階に応じた保育・教育内容の充実を図るとともに、双方が互いの保育・教育を理解し、幼児期の教育から小学校教育へ円滑に接続していくための連携を深めていくことが大切です。

### 取組のポイント

- 幼児と児童にとって、ともに育ちや学びにつながる交流活動を行う
- 保育士・幼稚園教員・小学校教員が、保育・教育内容や指導方法の相互理解を図る
- 保・幼・小連携を年間指導計画に位置付ける



## 具体的な取組

(平成19～21年度保幼小連携推進モデル事業の取組より)

### ともに育ちや学びにつながる交流活動を行うために

子ども同士の交流活動は、「やってあげる」「招待する」というものではなく、双方に学びのある、ともに主体として活動できる内容を考えましょう。

そのために、交流活動の事前の打ち合わせ、事後の振り返りが大切です。

#### 事前の打ち合わせ

(互いのねらいや目標を確認し、活動計画を立て指導案を作成する)

#### 交流活動

(保育士や教師が協働して子どもに関わり、活動を進める)

#### 事後の振り返り

(交流活動の実際をねらい・目標に照らし合わせて反省・評価し、次の活動に生かしていく)

### 保育士・教師の情報交換や相互理解のために

子どもの育ちや学びが保育所・幼稚園から小学校へ接続していくために、教職員同士が、実際の保育・授業を通して情報交換をしたり、合同研修会を開催しましょう。

#### 連絡会の開催

- ・年度当初に、引継ぎ内容や年間スケジュールについて協議し、担当者が代わっても連携の取組が継続していくように、前年度の取組を生かしていく。
- ・交流活動の事前打ち合わせ、事後の振り返りや活動計画の確認をする。

#### 保育参観・授業参観

- ・互いに保育所・幼稚園、小学校を訪問し、保育や授業を参観し、事後の協議に参加する。

#### 合同研修会の開催

- ・保・幼・小の保育士・教師が一堂に会し研修することで、保育・教育内容等の共通理解を図り、互いの情報の共有をする。

### 保・幼・小連携を年間指導計画に位置付ける

年度当初に計画・立案し、必要に応じ見直ししながら、次年度につなげていきましょう。

#### 組織全体で検討する

- ・交流活動を低学年だけのものと捉えず、すべての学年・領域等で検討する。

#### 保・幼・小間で情報交換する

- ・互いに子どもの成長につながる内容となっているか、育ちや学びの連続性を踏まえて互いに見直ししながら、わがまちならではの連携の年間指導計画としていきましょう。

県教育委員会では、地域の実態に即した主体的な取組を支援する「保幼小連携推進支援事業」を行っています。

連携の一步を踏み出そうとしている地域あるいは連携をより深めたい地域の先生方、ぜひご一報ください。

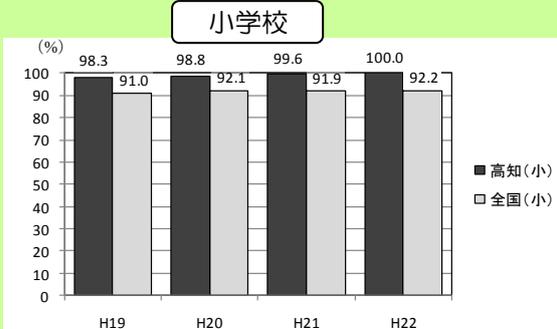
☞ (連絡先：幼保支援課 幼児教育担当 088-821-4881 まで)



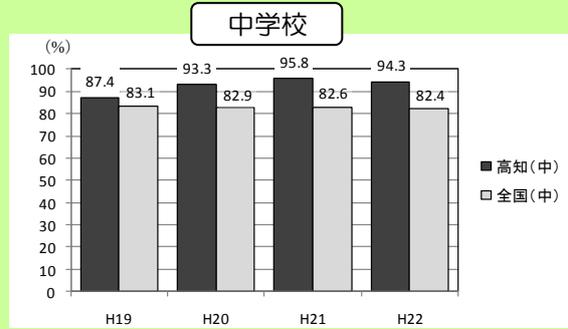
4年間で、講師を招聘する形での研修、実践的な研修の機会は増えています。  
 今後は研修の質を一層高めるとともに、その内容を日々の教育活動に生かしていくことが大切です。

※肯定群の割合

学校でテーマを決め、講師を招聘するなどの研修を実施

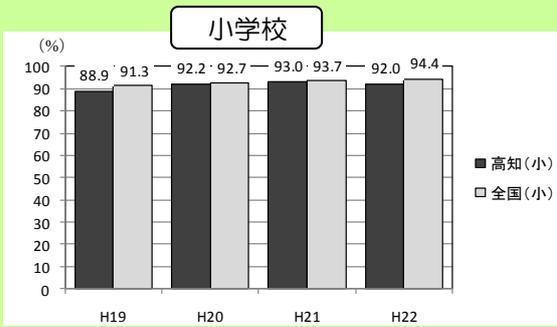


【学小 86】

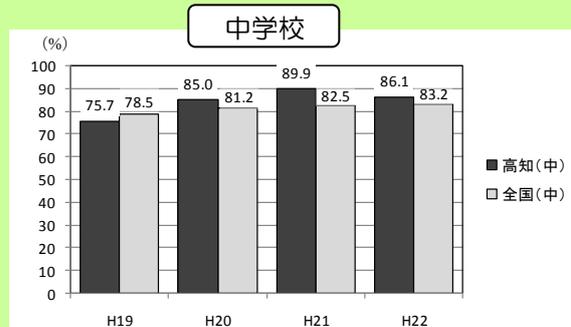


【学中 85】

模擬授業や事例研究など、実践的な研修を実施



【学小 87】

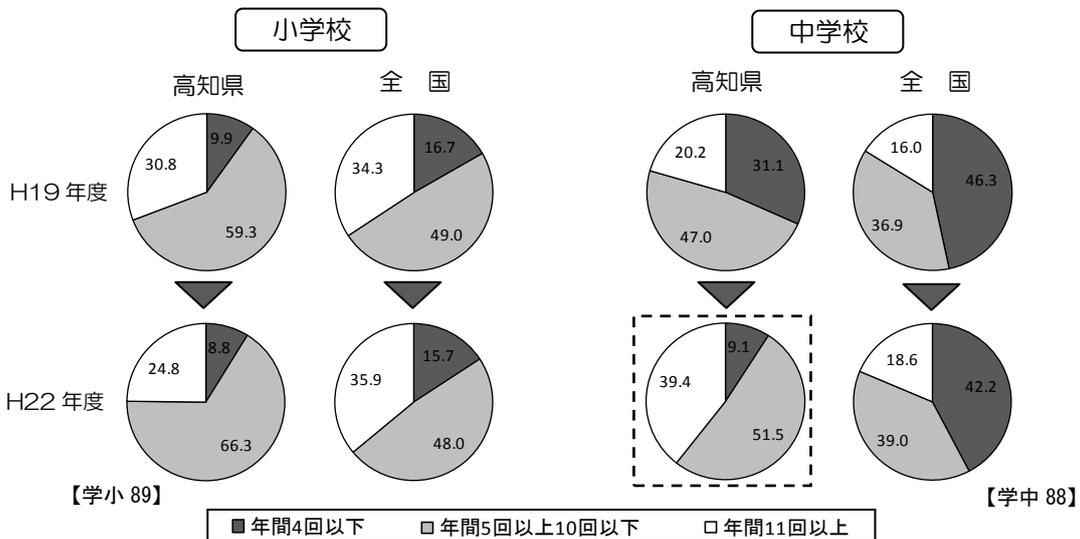


【学中 86】

本県では、特に講師を招聘する形での研修の実施率が、全国と比べて高い。

2. 授業研究の実施回数について

授業研究を伴う校内研修を前年度、何回実施しましたか

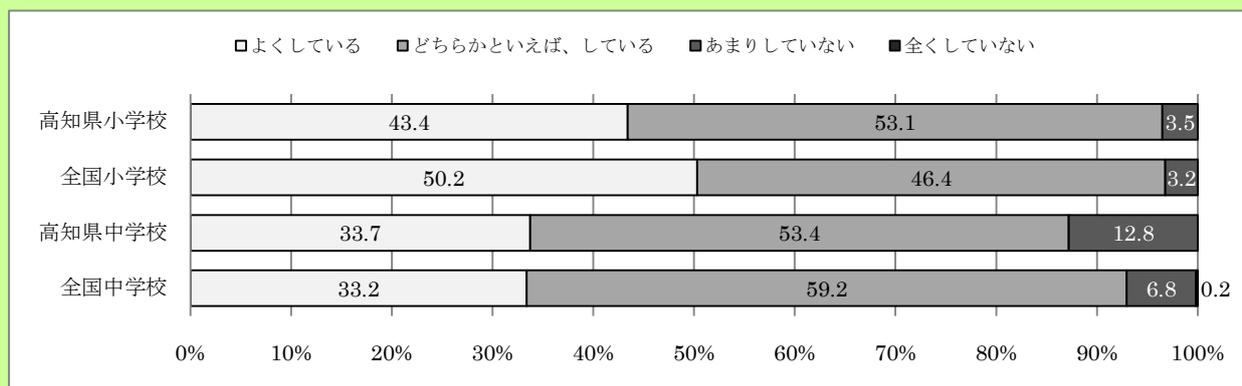


【学小 89】

【学中 88】

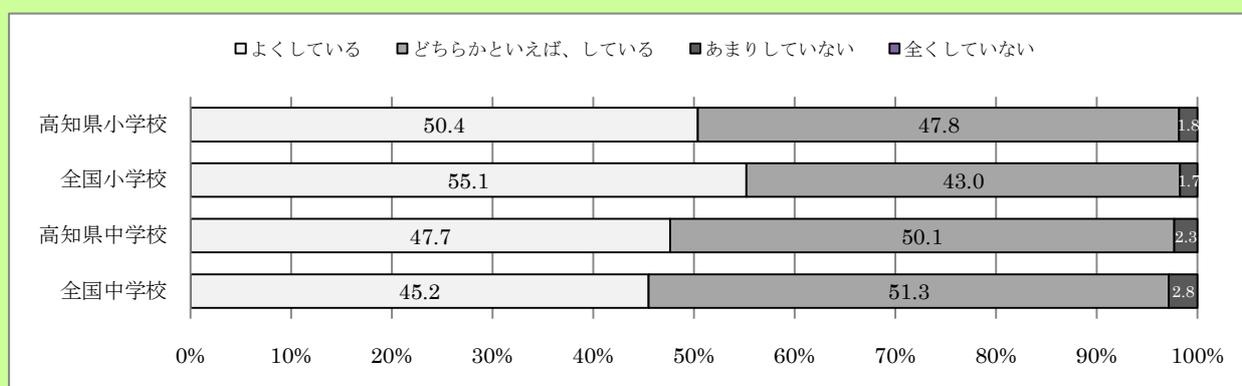
特に本県の中学校では、授業研を伴う校内研修の実施回数が平成19年度と比べて多くなっていることがうかがわれる。

### 指導計画の作成にあたっては、教職員同士が協力している



【学小 91、中 90】

### 学校の教育目標やその達成に向けた方策について、全教職員で共有し、取組にあっている



【学小 92、中 91】

指導計画の作成にあたっての教職員の協力体制は、全国に比べて低い。

学校の教育目標の達成に関して教職員で共有している肯定群の割合は全国とほぼ同じで、その割合も高いが、「よくしている」の小学校は、全国より 4.7 ポイント下回っている。

校内研修や学校の組織的な取組に関する調査結果を見ると、高知県の小・中学校の意識がよりよく変化してきていることがうかがえます。今後も、教職員の確かな協力体制を築き、「学力向上の学校改善プラン」等に基づいて、学力向上のPDCAサイクルを継続的に回すことが大切です。

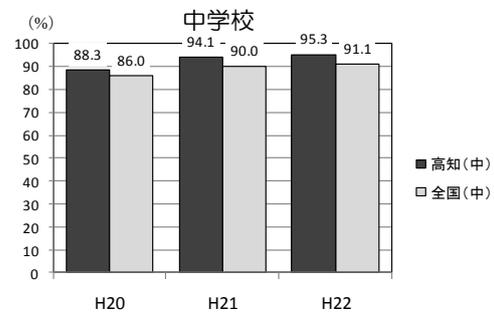
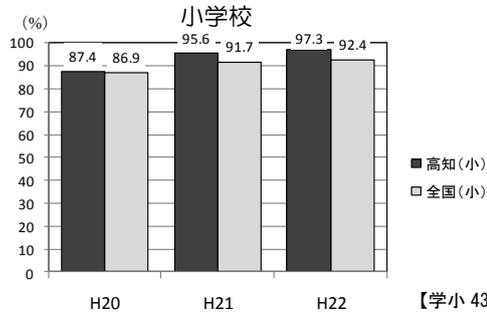
特に中学校では、授業研究を伴う校内研修を年間9回以上実施している学校の割合は全体のほぼ三分の二を占めており、積極的に授業改善に取り組む学校が増えていることが推測されます。今後は、授業改善の方向性を明確にもち、事例研究を含め、その質を高めていくことが重要です。

その際、教育における「不易と流行」を明確にし、適切に実践していく視点から取組を検討することも大切です。

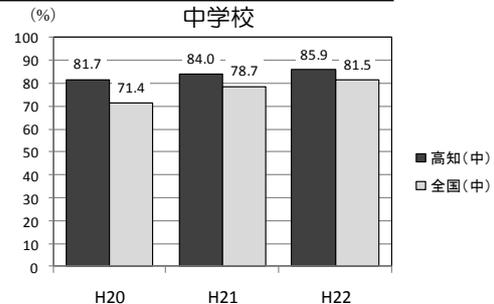
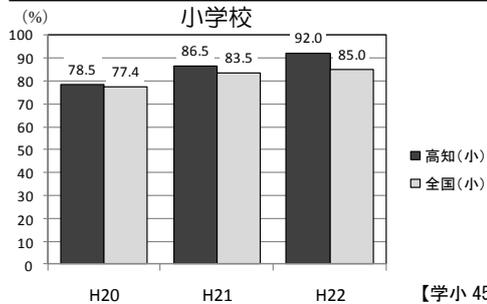
各学校で全国学力・学習状況調査結果の活用が進んでいます。

※「はい」と回答した割合

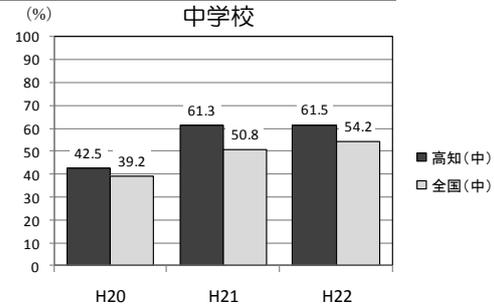
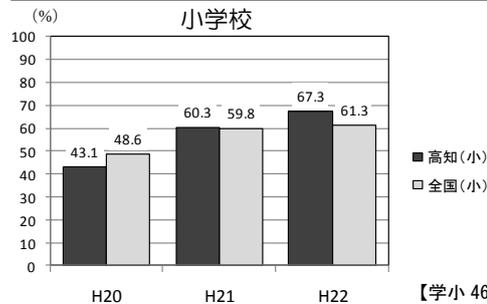
昨年度調査の自校の結果を分析し、指導計画等に反映させた



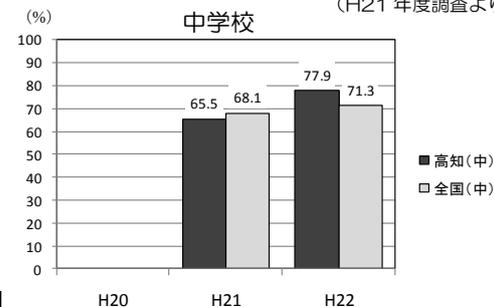
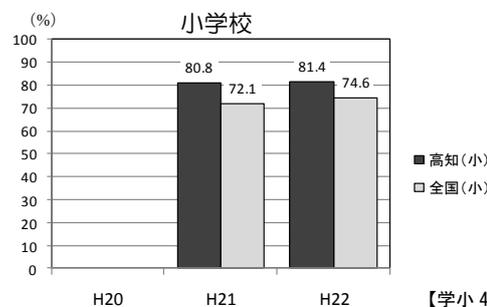
昨年度調査の自校の結果を、学校全体で教育活動を改善するために活用した



昨年度調査の調査問題を授業の中で活用した



昨年度調査の自校の結果について、保護者や地域の人に対し公表や説明を行った

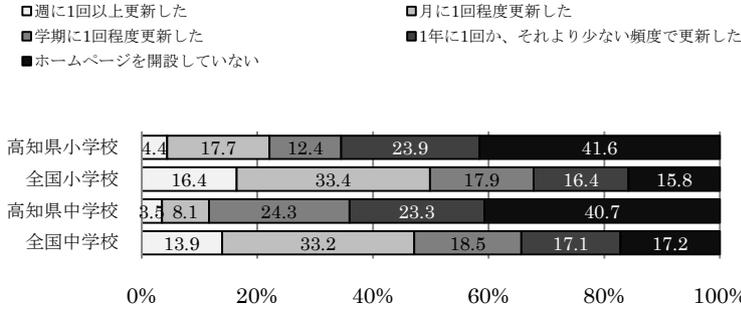


全国学力・学習状況調査結果の活用率においては、本県は小中学校ともに増加傾向にあり、平成22年度は、ほとんどの項目で全国より高い状況にある。

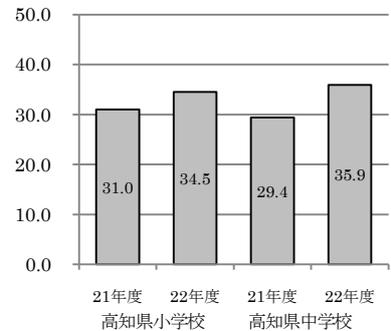
教育活動や指導の改善を図るうえで、調査結果の分析によって改善策を見だし、それを確実に実践につなげていくことが大切です。

小学校、中学校とも保護者との連携や地域との連携をさらに進めましょう。

学校の教育活動について、ホームページを更新し情報提供している

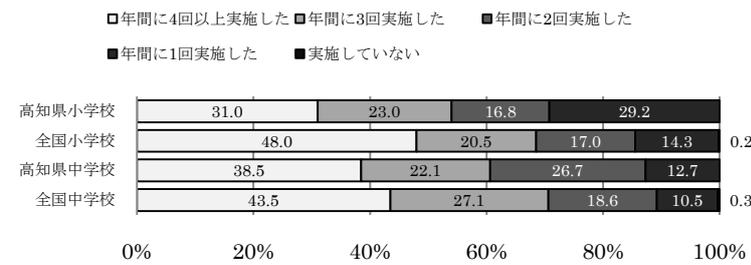


学期に1回程度以上更新した割合の経年比較

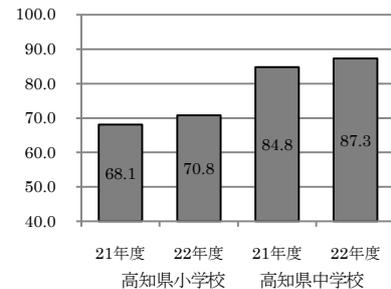


【学校小83、中82】

保護者から意見や要望を聞くための懇談会やアンケート調査を前年度に実施した回数

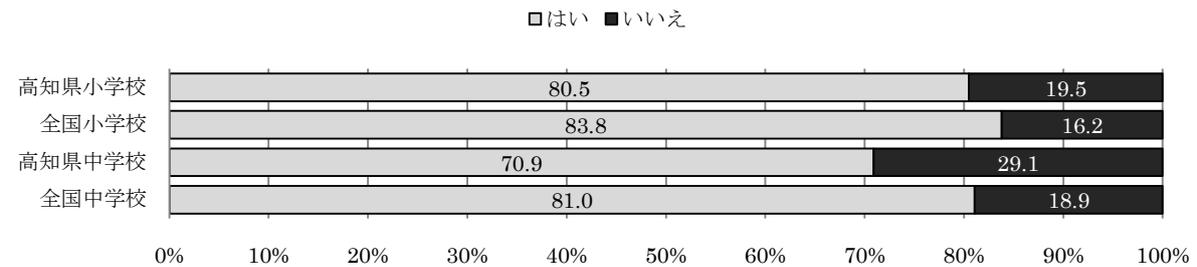


年間に2回以上実施した割合の経年比較



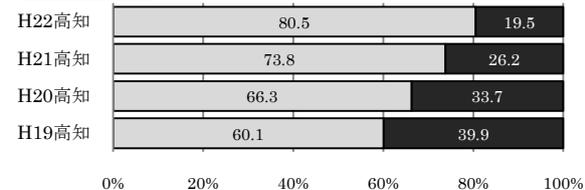
【学校小84、中83】

地域の人が自由に授業参観できる学校公開日を設けている

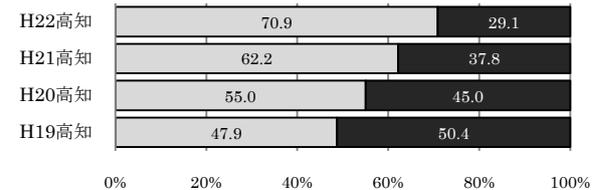


【学校小85、中84】

小学校



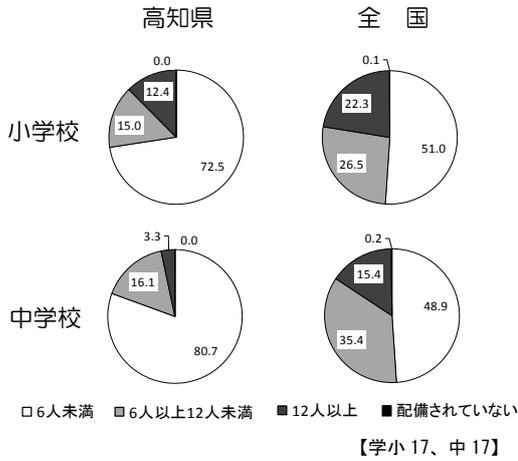
中学校



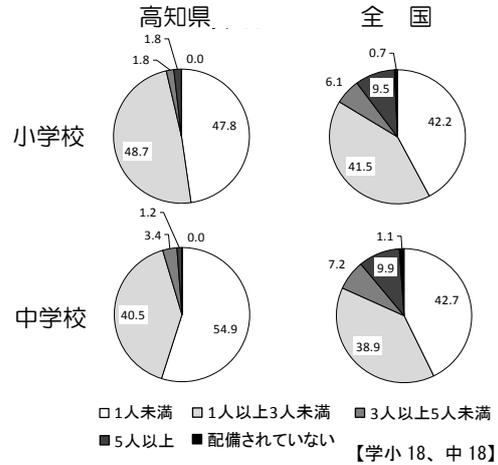
学校の情報提供としてホームページの開設や更新、保護者から意見や要望を聞くためのアンケート調査の実施、学校公開日の設置など、保護者や地域との連携について改善傾向にはあるが、全国の状況と比べると、依然として小・中学校とも低くなっている。

各学校へのコンピュータの配備は着実に進んでいます。

教育用コンピュータ 1 台あたりの児童・生徒数



職員用コンピュータ 1 台あたりの職員数

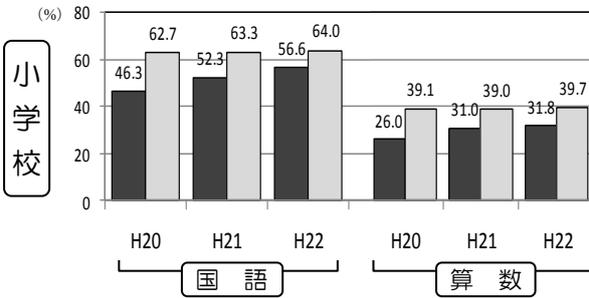


高知県の、配備コンピュータ 1 台あたりの児童生徒数、職員数は全国と比較すると少なく、コンピュータの活用の際に比較的整った環境にあるといえる。

授業の指導充実のために、コンピュータ等の活用について工夫することも大切です。

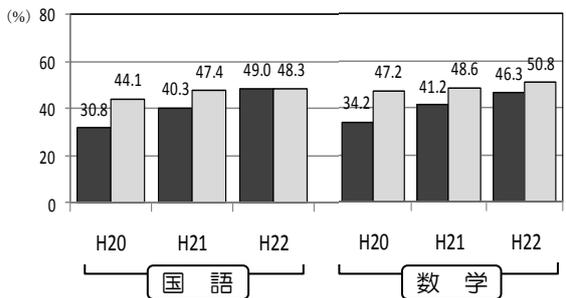
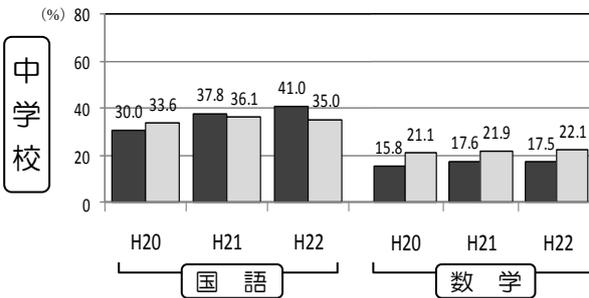
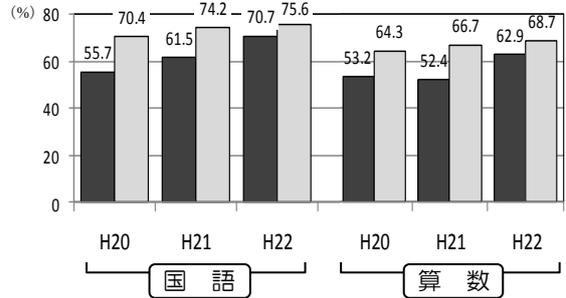
授業で、児童生徒が、発表や自分の考えを整理する際に、コンピュータを使う学習活動を行っている

学期に 1 回以上行っている割合（経年比較）



授業で、教員がコンピュータ等を使い、資料等の拡大表示や、デジタル教材を活用するなどの工夫を行っている

学期に 1 回以上行っている割合（経年比較）



【学小 38、41、中 38、41】

【学小 39、42、中 39、42】

■高知 □全国

全国的にみて、授業におけるコンピュータ等の活用率は、小学校の方が高いことがうかがえる。高知県では、平成 20 年度の時点から比べると、活用率は徐々に高くなってきているが、中学校の国語の授業以外は、全国より低い状況となっている。

ICT の活用で学力が向上することは実証されており（文部科学省委託事業「ICT を活用した授業の効果等の調査事業」）、各学校に整備された ICT 環境の効果的な活用が求められます。